

コロナで薄れたつながりを「コミスク」でつないだ6年間～つながりの中で学びの主人公を育てる～

取組のあらまし

取組団体 兵庫県養父市

取組内容 建屋小学校は平成30年に但馬地域で初めて「小規模特認校制度」を導入した。また、学校運営面では、令和元年度から、コミュニティ・スクール（以下コミスク）となり、「地域とともにある魅力ある学校づくり」を旗印に、「チーム建屋」として、学校と地域・家庭・行政の協働で教育を進める活動を展開した。

1 兵庫県養父市の概要

人口	21,005人	令和7年1月1日現在（住民基本台帳人口）
職員数	230人	令和6年4月1日現在（一般行政部門）
総面積	422.91km ²	令和7年10月1日現在（国土地理院「全国都道府市区町村別面積調」）

図表 1 養父市 位置図



出所：養父市 ホームページ

2 取組の背景・目的

(1) 小規模特認校制度の導入

兵庫県養父市立建屋小学校（建屋小学校）は、平成 17 年に統合開校した。当初の児童数 122 名から数年後に半減し、多くの複式学級を抱える過小規模校となった。こうした少子化下の小学校活性化策として、建屋小学校は平成 30 年に但馬地域で初めて「小規模特認校制度」を導入した。

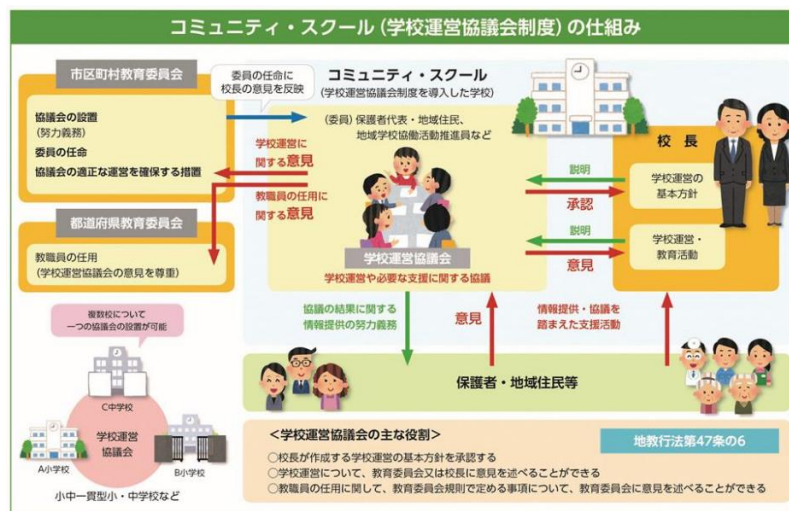
小規模特認校制度とは、「学校選択制」の一形態である「特認校制」のうち、「小規模校」において取り入れられている制度で、従来の通学区域を残したままで、特定の学校について、通学区域と関係なく、当該市町内のどこからでも通学を認めるものである。小規模特認校では、特色ある教育を推進し、区域外の児童を呼び込むことにより、子どもたちの活動を充実させることや、複式学級の解消など学校の活性化を図ることをねらいとしている。建屋小学校は、この制度活用により、特色ある教育活動の展開を推進した。

(2) コミュニティ・スクールとしての取組

また、学校運営面では、令和元年度から、コミュニティ・スクール（以下コミスク）となり、「地域とともにある魅力ある学校づくり」を旗印に、「チーム建屋」として、学校と地域・家庭・行政の協働で教育を進める活動を展開した。

しかしながら、コロナ禍により、強みであった地域とのつながりが希薄になるなどの課題が生まれ、改善のための方策として、①特認校・小規模校の強みを生かした実践、②やぶ・ふるさとキャリア教育の充実等に、コミスクとしての体制を活かして取り組んだ。

図表 2 コミュニティ・スクールの仕組み



出所：養父市教育委員会「コミュニティ・スクールってなんだろう!？」

3 取組内容

(1) 小規模特認校としての特色ある教育活動の展開

建屋小学校では、小規模特認校であることを強みとして活かし、英語教育の充実や演劇を通じた表現力の育成など、特色ある教育活動支援に注力している。この取組が注目を集め、令和6年度は、児童数48名のうち17名が小規模特認校制度を利用して通学しており、その割合は増加傾向にある。

ア 特色ある英語教育

建屋小学校では、「小さな学校発、世界につながる挑戦」を合言葉に英語学習に取り組んでおり、ALT(外国語指導助手)の常駐による日常的にネイティブな英語にふれる活動の実施に加えて、①イングリッシュマラソン(全校生:6月)、②オーストラリア パース市・ダルキース小学校訪問(6年生希望者:夏休み)、③オンライン英会話(5・6年生:通年)、④スピーチコンテスト(全校生:2月)などの特色ある英語教育を推進している。

図表 3 オープンスクールの概要(2024年度)



1 日時	2024年6月22日(土) 午後1時15分～2時45分 *オープンスクール2日目
2 場所	養父市立建屋小学校(養父市建屋1048) 各教室(体育館、多目的室、English room ほか)
3 対象	建屋小学校児童48人、教職員17人、保護者・地域ボランティア10人程度
4 概要	4つの異年齢集団(縦割り班)に分かれた児童が、ポイントラリー形式で7つの英語ブースを回り、英会話やクイズなどのミッションに挑戦します。昨年度は、参加された親子や地域の方もグループを作り、児童と同じようにブースを回って英会話を楽しみました。

出所：養父市記者発表資料(2024年6月11日)

イ 劇団の演劇指導による表現力の育成

建屋小学校と「兵庫県立ピッコロ劇団」とは、平成23年10月以来、創作劇「ふるさとたきのや物語」の上演を通じて、劇団員の演劇指導による表現力の育成に取り組んでいる。令和6年には建屋小学校の創立20周年を記念して、ピッコロ劇団おでかけステージ「学校ウサギをつかまえろ」が開催された。

ウ 校区内の農園での収穫体験

建屋小学校では、いちご狩り、コメの収穫などの収穫体験を地域住民の協力により実施している。

(2) 学校・家庭・地域・関係機関の4者協働による地域学校協働活動の展開

小規模校として地域住民の経験を教育に生かすため、保護者・自治会・専門機関・PTA・子ども会などが一体となった「チーム建屋」の支援体制を築き、学校・家庭・地域が役割分担して児童を育てる仕組みを整えている。令和6年度の場合下記の取組が展開されている。

- ① 「ふるさとたきのや物語」（地域を題材にした創作劇）上演：兵庫県立ピッコロ劇団との連携
- ② たきのや Festival（秋のオープンスクール）：校区民による作品展、カフェ、物品販売。200名を越える来校者、校区外からの参加者あり。※午後は「PTA 親子講演会」開催
- ③ 「たきのや大人の学校」（8回のうち4回は小学校を会場に開催）
- ④ 20周年記念行事： 秋季大運動会（9月）→ピッコロ劇団おでかけステージ（10月）→たきのや Festival（11月）という3部構成で、地域・関係機関との協働体制を強化

図表 4 たきのや Festival（秋のオープンスクール）

16日（土）に「たきのやFestival」を開催しました。5歳児を対象としたオープンエレメンタリースクール・「ふるさとたきのや物語」上演・PTA親子教育講演会を実施しました。オープンエレメンタリースクールでは、5歳児がALTと一緒に外国語を使った歌やゲームを楽しみ、小学校1年生と交流しました。また、「ふるさとたきのや物語」では、地域について学んだことを劇にし、全校生で表現しました。



出所：養父市立建屋小学校 HP「トピックス」

(3) 取組の推進体制

建屋小学校の運営体制は、学校運営協議会と地域学校協働本部の2本柱で支えられている。

学校運営協議会は保護者・地域などで構成され、年4回の会議（4月・9月に計画協議、11月・2月に評価検証）で学校教育活動の検討とPDCAサイクルによる改善を繰り返している。重点目標に「つながりの中で学びの主人公を育てる」を掲げ、児童の「知・徳・体」のバランスある育成と地域愛の醸成を志向している。

また、地域住民の経験を教育に生かすため、保護者・自治会・専門機関・PTA・子ども会などが一体となった「チーム建屋」の支援体制を築き、学校・家庭・地域が役割分担して児童を育てる仕組みを整えている。

校区住民による「たきのやっ子応援団」は常時40名以上の登録があり、草刈り・登下校見守り・授業支援など多岐にわたるサポートを提供している。また、地域コーディネーターや地区自治協議会を窓口据え、「やぶ・ふるさとキャリア教育」を推進。地元産業・文化ガイドの派遣、地域行事への参画、PTA主催の親子教育講演会開催などを系統的に行い、学校と家庭・地域・関係機関が連携する組織的な体制を築いている。

図表 5 学校運営協議会で話し合う内容（令和元年度建屋小学校）

第1回 4/20	第2回 6/27	第3回 8/29
<ul style="list-style-type: none"> ○会長・副会長選任 ○学校経営の説明 ○経営案の承認 ○意見交流 	<ul style="list-style-type: none"> ○協議事項 ・学校行事 ・オープンスクール ・パース市との交流 ・運動会 ・学校施設の活用 	<ul style="list-style-type: none"> ○協議事項 ・学校行事 ・パース市との交流 ・市への要望 ・子どもの安全確保 ・スポーツクラブ21
第4回 11/11	第5回 1/21	第6回 2/21
<ul style="list-style-type: none"> ○協議事項 ・研究発表会 ・入学説明会 ・スキー教室 ・特認校制の広報 ・地域づくり計画 	<ul style="list-style-type: none"> ○協議事項 ・学校評価 ・来年度の学校行事 	<ul style="list-style-type: none"> ○学校関係者評価 ○協議事項

学校運営協議会委員の構成（令和元年度建屋小学校の例）

地域活性化対策委員会長 区長 老人会長 前学校評議員 三谷校区自治協議会主事
 小規模特認校推進委員 PTA会長 建屋校区自治協議会事務局長 校長 事務職員

出所：養父市教育委員会「コミュニティ・スクールってなんだろう!？」

4 成果・課題

(1) 成果

本取組により、コロナ禍で希薄化した学校・家庭・地域の絆が徐々に再生した。年間オープンスクールの来校者は、令和2年度の418名から令和3年度に244名と落ち込んだものの、令和4年度457名、令和5年度577名と増加している。

例えば、毎秋開催する「たきのや Festival（秋のオープンスクール）」には校区外からも参加者が多く集まり、令和5年は200名を超える来校者を記録した（校区内外での作品展示やカフェ出店等を実施）。このようなイベントが地域連携の場となり、多世代交流や地域資源の再発見につながっている。

児童や保護者の満足度も高い。児童に対して実施している生活アンケートで「学校生活が楽しい・少し楽しい」と答えた児童が令和3年度88.4%、令和4年度95.1%、令和5年度97.7%と、9割以上にまで高まっている。児童自身が学校生活に前向きに向き合い、地域活動にも意欲的に参加する姿勢が見られる点は大きな成果である。

保護者からは、令和5年度の調査で下記の声が寄せられている。

- ・ 「本校の教育活動がお子様や保護者の期待に応えているか」肯定的評価 100%
- ・ 「小規模特認校として特色ある学校づくりが進められているか」肯定的評価 100%
- ・ 「コミスクとして地域とともにある学校づくりが進められているか」肯定的評価 97.7%

（2）課題

今後の課題としては、取組の持続可能性の確保や、地域住民の更なる関わりの深度化があげられる。現状は一部の熱心なボランティアや委員に運営を依存している面があり、若年層や新規保護者の参画促進、後継体制の構築が望まれる。また、将来的には同校モデルを他地域に展開することも検討課題といえることができる。

関連・参考資料

養父市教育委員会「コミュニティ・スクールってなんだろう!？」

<https://www.city.yabu.hyogo.jp/material/files/group/36/komyunitelisuku-ru.pdf>

養父市「小規模特認校」

https://www.city.yabu.hyogo.jp/soshiki/kyoikuiinkai/kodomo_manabi/gakko_kyoiku/syoukibotokuninnkou/index.html

養父市記者発表資料

<https://www.city.yabu.hyogo.jp/material/files/group/2/0611press3.pdf>

<https://www.city.yabu.hyogo.jp/material/files/group/2/teireil010246.pdf>

養父市立建屋小学校「トピックス」

<https://yabuboard.ed.jp/takinoya-es/category/topics/>

文部科学省「令和6年度「コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進」に係る文部科学大臣表彰被表彰取組事例集」

https://manabi-mirai.mext.go.jp/upload/R6hyousyou_jireisyu.pdf